

和服に対する女子大生の意識と実態

—新学習指導要領との関わり—

梶 崎 久美子*

(2015年11月13日 受理)

Female College Students Consciousness and Actual State toward Japanese Clothes

— Relation with New Curriculum Guidelines —

Kumiko NARAZAKI*

1. はじめに

現在和服といえば、お宮参りや七五三、成人式、結婚式などの通過儀礼の際に着用するもので、洋服が日常の装いである現代の日本人にとって、特別な時に着る装いとして認識されていると考えられる。しかし、その一方で、中学校家庭では平成20年3月に改訂が行われ、平成24年度から全面実施、高等学校の家庭総合、生活デザインの2科目においては平成21年3月に改訂、平成25年度入学生から年次進行で、学習指導要領に和服の着装や構成などが取り上げられた。着用する機会が多い衣服であるとはいえないが、和服が日本人の衣生活においてなくてはならない、そして、国際社会で活躍を期待される若い世代に伝えていくべき衣服であるという観点から取り上げられたのだと考えられる。

確かに、近年若い女性の「キモノブーム」という社会現象も見られる。従来和服を取り扱う老舗の呉服店からの発信ではなく、若いキモノ愛好家やデザイナーがアンティークキモノを洋服小物とあわせたコーディネートで楽しんだり、洋風の柄や色を大胆に配したデザインを発表したり、着物を着るイベントを若者が企画・運営したりしており、新しいキモノ文化が発信されているのである。それを受けて、これまでであれば10代から20代の和服といえば成人式や結婚式用の振袖がイメージされるが、夏になるとゆかたの着つけやヘアスタイルに関する書籍やそれを特集する雑誌がここ数年豊富に出揃うようになっている。

実際、国立国会図書館のデータベースで「ゆかた（浴

衣）」でキーワード検索をし、着つけ、メイク、ヘアスタイルに関する書籍を抽出したところ、160冊が該当し、以下の結果になった（図1）。

浴衣の着方にそもそもの変化はないが、2004年を皮切りに毎年関連書籍が発売されているということは、その年の流行に沿った着こなしやメイク、ヘアスタイルがあるということを示唆している。そして、一時話題になった花魁風の着つけ（図2）が登場するのが2009年頃であり、従来の着方とは異なったコーディネートや浴衣小物の洋風化なども注目すべき浴衣文化の変化としてとらえることができる。

また、浴衣とはかつては呉服店や百貨店において購入する、あるいは自分で作るというものだったが、2003年にファストファッションの旗手であるユニクロが安価な浴衣と作り帯と下駄と巾着と腰紐のセットを発売したことにより、身近な和服として世間に広まったと考えられる。その後、ユニクロは2011年まで毎年有名デザイナーとコラボしたり、古典柄を復刻したりして、浴衣文化を

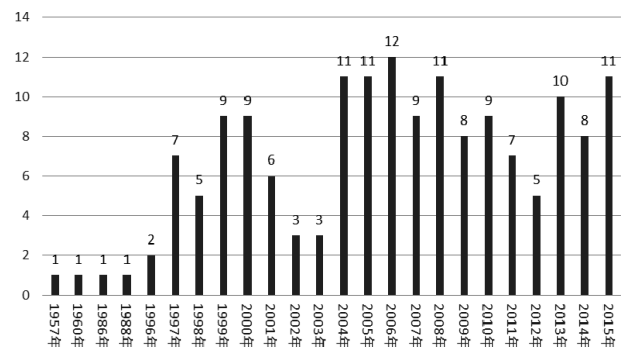


図1 キーワード「ゆかた（浴衣）」に該当する書籍の冊数

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン・建築学科
准教授



図2 花魁風の着つけの様子
(阿部浩二, 『コーデから着つけ, ヘアメイクまで! 派手カワ♡ゆかた』, ブティック社, 2010年, P. 60)

盛り上げてきた。2011年にいったん販売をやめたユニクロであったが、その後もファッション雑誌では着こなし、メイク、ヘアスタイル、ネイルデザインなど多方面から特集を組まれ、定番化が見受けられる。百貨店や呉服店でも毎年浴衣は取り上げられているが、日常的な買い物の場所として利用される大型スーパーのイオンやフジなどでもオリジナル浴衣を展開しており、2015年にはユニクロが浴衣の販売を再開したことで、浴衣が和服の中でもかなり身近な衣服として受け入れられていることを示唆している。

このことから、和服に対する意識と実態は今後確実に変化していくことが予測される。そこで、本研究では、和服のうち、学習指導要領でも例として出た浴衣に着目し、女子大生のそれに対する意識及び実態を継続的に調査することによって、指導要領による教育の影響を究明することを目的とする。

2. 先行研究について

和服や和装に関する先行研究は数多くある。多くは構成や文様、色彩、歴史的観点から様々に述べられているが、和服と教育の関わりについて述べられている研究には以下のようなものがある。

藤井志保氏ほかによる「中学校技術・家庭 家庭分野における衣生活文化の題材開発：浴衣の着装体験による効果の検証（今日的な課題）」^{注1)}では、浴衣の着装体験を通じて、和服と洋服の違いや衣生活文化に対する意識に変容が見られることを明らかにしている。また、薩本弥生氏ほかによる「きもの文化の伝承をめざした浴衣の着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家

庭科での授業実践：教育学部の大学生アシスタントティーチャー（AT）活用した試みから」^{注2)}では、大学で着つけの技能を中心に「きもの」文化に対する意識啓発と技能習得のためのトレーニングを積んだ学生をATとして活用することで、教員に余裕が生じ、生徒への示範や指導が行き届き、授業が円滑に進行し、着装技能の理解や修得意識が向上し、きもの文化に対する興味関心の喚起にも有効であることを明らかにした。

このように現中学生に対する和服を取り上げた題材研究や教育プログラムの研究は着々と進んでいる。

しかし、これらの研究でも指摘されていることであるが、これからの家庭科教員には和服の着装技術や知識が必須である。よって、女子大生に着装実践を行なうことでどのような教育効果があるかということも調査し、家庭科教員養成課程の学生への指導プログラムに必要な条件も検討する。

3. 方法

(1) 調査対象

広島女学院大学の学生

(2) 調査年月

2013年6月、2014年6月、2015年6月～9月

(3) 内容

著者主催のゆかた着つけ講座及び地域の浴衣の着はじめの祭りとして認識されている「とうかさん」祭り^{注3)}への参拝イベントを企画し、参加者に申込用紙に質問項目を含めて渡し、意識及び実態調査アンケートを行なった。この調査を以下、調査Aとする。また、2015年はそれに加え、オープンキャンパスで手伝いをする学生に浴衣着用の希望を取り、その学生への意識及び実態調査を行なった。この調査を以下、調査Bとする。

4. 結果及び考察

(1) 調査Aの結果及び考察

2013年は著者が担当する3年ゼミ生のみ、2014年、2015年は全学に学内ポータルサイトを使って告知した結果、参加人数と学年は以下の結果となった（図3）。

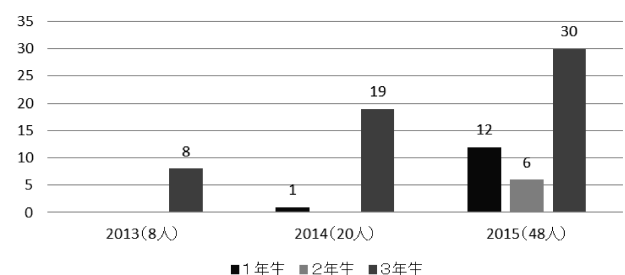


図3 参加人数と学年（人）

2015年度は特に参加が多く、浴衣に対する興味・関心は、増加傾向にあると言える。

次に、着用頻度について、「毎年」、「2～3年継続」、「3年ぶり」、「子供のころ以来」、「着たことがない」から1つ選んでもらった。以下が結果である（図4）。

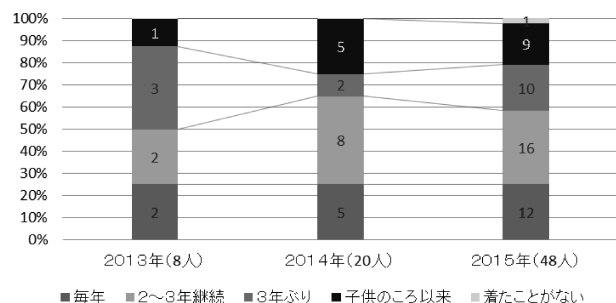


図4 着用頻度の実態

どの年もここ数年継続してゆかたを着用している実態が明らかとなり、浴衣が夏の衣服の1つとして定番化していることと対応した結果だと考えられる。

次に浴衣を着用する際は誰に着つけてもらうか、という質問に対して、「自分」、「保護者」、「プロ」から1つ選んでもらった。以下が結果である（図5）。

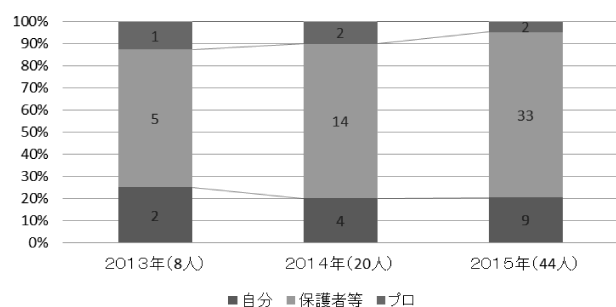


図5 着つけ者の実態

およそ2/3が保護者に着つけてもらっている実態が明らかになった。また、着付けをプロに頼む割合は少ないが、ヘアセッティングは美容室で事前にしてもらい、このイベントに参加をしたという学生もあり、ゆかたを着用する際、やはりどこか特別なものである、という感覚が認められる。

次に、浴衣の所持枚数について、「1着」、「2～3着」、「4着以上10着未満」、「10着以上」、「持っていない」から1つ選択してもらった。以下が結果である（図6）。

1～3枚程度が多い結果となった。どの年も3年生の参加が半数以上で、調査を行なった学生のほとんどが所属する学科では2年生で浴衣制作の授業があるため、複数枚所有する学生が多くなったと考えられる。しかし、2015年は他学科の学生も複数枚所有している実態も明ら

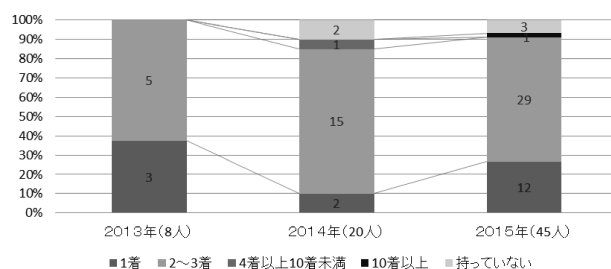


図6 浴衣の所有枚数の実態

かになり、人によっては浴衣を着てでかける機会が複数回あるため複数枚所有している、という見方もできる。

次に、浴衣に対する印象について、「かわいい」、「きれい」、「大人っぽい」、「子どもっぽい」、「着づらい」、「着やすい」、「古い」、「面倒くさい」、「その他」からあてはまる言葉を全て選んでもらった。以下が結果である（図7）。

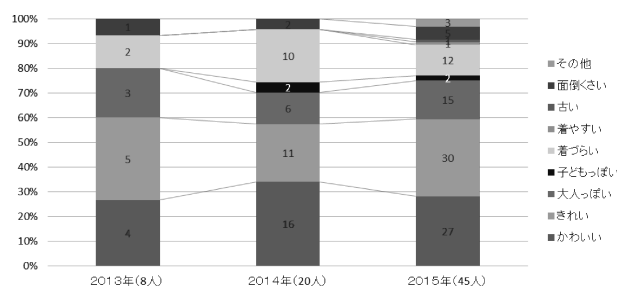


図7 浴衣に対する印象

女子大生は基本的には浴衣に好印象を持っているが、着用に関しては否定的であるという結果になった。今年はその他の意見もあり、「渋い」、「古風」という和装ならではのイメージを持つ女子大生も見られた。これらは一般的な浴衣へのイメージとそう違いがないと考えられる。

次に2015年は参加者が多かったことがあり、メールによる事後アンケートを行なった。ゼミとは関係のない自由参加者23名の内、19名が回答し、3年生が4名(21%)、2年生が5名(26%)、1年生が10名(53%)であった。企画への参加募集告知は1年生が入学して1ヶ月後であったにもかかわらず、このような企画に参加することから浴衣への関心が高かったと見ることができる。

これらの学生に参加動機を「自分で浴衣を着てみたいと思ったから」、「友人に誘われたから」、「着つけが無料で習えるから」、「主催教員の授業を受けたことがあったから」、「とうかささんに行ってみたかったから」、「その他」から2つまで選択してもらったところ、以下の結果となった（図8）。

結果を見ると、とうかささんという行事に興味があるというよりは浴衣を着たいという意識が高いことが分かる。1年生の何名かが友人に誘われたから、と答える学

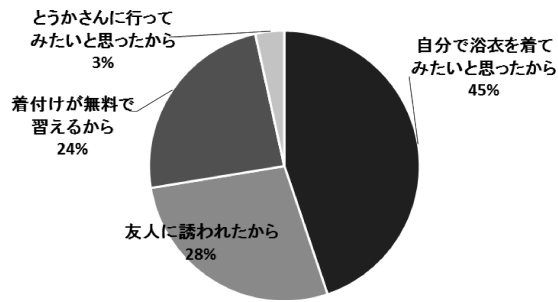


図8 参加動機 (2つまで選択可 N=29)

生がおり、入学して数ヶ月のうちに行なわれる浴衣の着装体験を含むこの企画は友人関係を構築するよい機会になっているといえる。

次に着付けの指導を受けた上で、着付けの手順の中で難しかったところを、「浴衣を肩にかけ、裾の高さを決めるところまで」、「腰ひもを結ぶところ」、「前後のおはしりを整えるところ」、「衣紋を抜くところ」、「衿を鎖骨のくぼんだ所に合わせるところ」、「胸紐を結ぶところ」、「帯を結ぶところ」、「その他 (自由記述)」から2つまで選んでもらったところ、以下の結果となった (図9)。

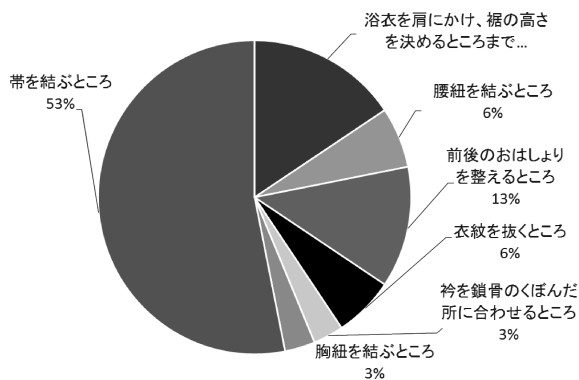


図9 着付けの難易点 (2つまで選択可 N=32)

結果は「帯を結ぶ」が圧倒的であった。続いて、「裾の高さを決めるところまで」、「おはしりを整えるところ」など、和装ならではの手順が苦手であると指摘できる。衣紋を抜くところは予想に反して少なく、本人たちとしてはある程度自分ではできている、と思っているようである。しかし、着装した姿を見る限りではまだ指導が必要だと考えられ、指導側と生徒側の意識の違いが大きいことが明らかとなった。よって、着付け指導の際には必ず正しい着装した姿を事前に確認させておく必要があると言える。

今後復習講座をしたら参加したいか、という質問について、「ぜひしたい」、「日程が合えばしたい」、「個別指導をしてほしい」、「特に必要ない」、「その他」から1つ選んでもらった。以下が結果である (図10)。

上記の通り、日程が合えばしたいと8割以上が希望し

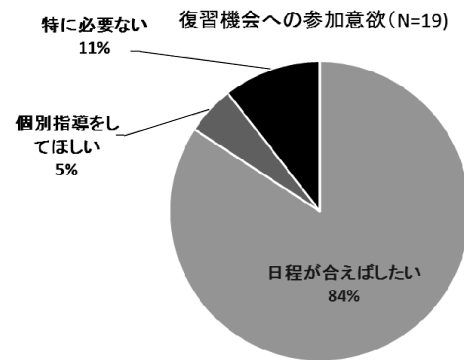


図10 復習機会への参加意欲 (N=19)

ており、より美しい着装した姿を目指す意識が発露したと考えられる。

最後に感想を200字程度で自由に書いてもらったところ、以下のような意見が見られ (図11)、これまで着付けを学ぶ機会がなかったこと、着られるようになれば積極的に着て出かけるという実態が明らかになった。

参加しての感想 (抜粋)

・「私は今回初めて浴衣を着ました。講習に参加して、浴衣って自分で着られるんだと思いました。帯も自分でできることにびっくりしました。とてもいい経験になりました。次、お祭りに行く時も自分で着付けして行きたいです。」

・中学生ぶりに浴衣をきました。自分で帯まで着付けることがなかったのも、とても勉強になりました。そして、どうかさんも初めて体験できこの企画に参加できて楽しかったです。

・「私は一人暮らしなので浴衣を一人で着ることが出来なくて困っていたところ友達にこのイベントに参加しようといわれました。浴衣を自分で着ることが出来るようになりとても嬉しかったです。日曜日にも自分で着付けて友達とどうかさんを楽しみました。」

図11 参加しての感想 (抜粋)

以上、調査Aの結果と考察をまとめると次のように言える。今回調査した女子大生はゆかたに対して好意的だが、着付けの経験は浅いことが明らかとなった。それは現在のゆかたの販売形態によるものだと考えられる。「はじめに」で述べたアパレル量販店や大型スーパーで販売されているゆかたの多くが、作り帯とのセットであるため、着付け方法や半幅帯の結び方は着方の書籍やファッション雑誌では取り上げられているものの、帯結びを含め着付けは保護者任せであった。しかし、本人たちが着方を理解すれば、また、帯結びの方法や装飾品のバリエーションを伝えれば、自発的にコーディネートを楽しむというのが女子大生の和装に対する意識と実態の特徴だと言える。

(2) 調査Bの結果と考察

調査Bでは着装機会を積極的に与えることによる意識

と実態を明らかにすることを目的として、本学のオープンキャンパスで学科の展示や企画の手伝いをする学生に、浴衣や帯、コーディネート用の装飾品も含めレンタルするので着てみないかと募集をかけ、希望者に着装実践を行なった（図12）。



図12 浴衣を着装し、学科制作企画の補助をする学生

夏のオープンキャンパスは全部で5回開催^{注4)}され、この調査には9名の学生が参加し、うち1回着用者が6名、3回着用者が1名、4回着用者が1名、5回着用者が2名であった。今回5回を通じてオープンキャンパスに参加した手伝い学生は延べ74名であり、そのうち浴衣着用学生は延べ23名（31%）であった。

まず、浴衣の準備実態であるが、着用回数が少ないほど、こちらで準備したもの^{注5)}をレンタルし、回数が多い学生は1回目ではレンタルしても2回目からは持参する、という変化があったことが注目される。返却の手間を省こうとする意識の表れと捉えることもできるが、自分の持っているものを活用する、という衣生活への自発的な働きかけであると見ることもできる。また、参加動機を「もともと浴衣を着るのが好き」、「オープンキャンパスの衣装にふさわしい」、「自分（あるいは友人）の作った浴衣が着たい」、「他のおもてなし学生と異なった格好をして目立ちたい、褒められたい」、「和装に興味があり、自分で着られるようになりたい」、「先生や友人に頼まれた」から1つ選んでもらったところ、以下の結果となった（図13）。

今回調査した学生はすでに過去に着つけ実践の授業を受けている学生もいたため、浴衣に対する印象はもともと良いという特徴があった。また、夏に開催されるオープンキャンパスであることから、浴衣が学科の企画を手伝うのにふさわしい衣装である、という結果も多く、特に第3回目のオープンキャンパスで和をテーマにしたインテリアデザインで学科展示を行なうことが事前にわ

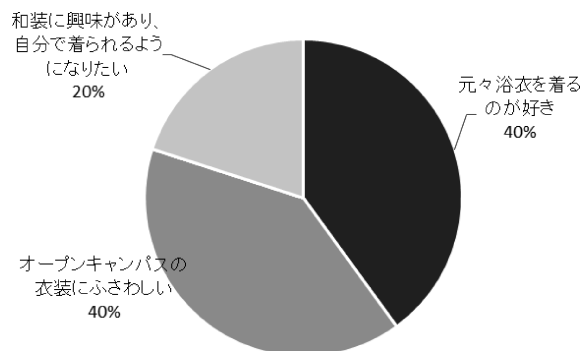


図13 参加動機 (N=10)

かっていたため、そのインテリアデザインにふさわしい衣装としてこの企画に参加した学生もあり、空間との親和性を浴衣によって高めようとする自主的な衣生活の創造の態度を見受けることができた（図14）。



図14 和の空間で高校生と話す手伝い学生

このような背景を踏まえ、オープンキャンパスでの浴衣着用のメリットを「来場者に話しかけやすい」、「来場者に覚えてもらいやすい」、「姿勢や所作を洋服の時より気にしなくてよい」、「長距離を歩く業務から外れることができた」、「浴衣製作や着つけの授業紹介がしやすい」、「自分に自信をもっておもてなしができた」、「メリットはなかった」、「その他」から1つ選んでもらったところ、以下の結果となった（図15）。

その他の意見としては、「浴衣をあまり着る機会がないので、この機会に浴衣を着ておもてなしがしてみたいと

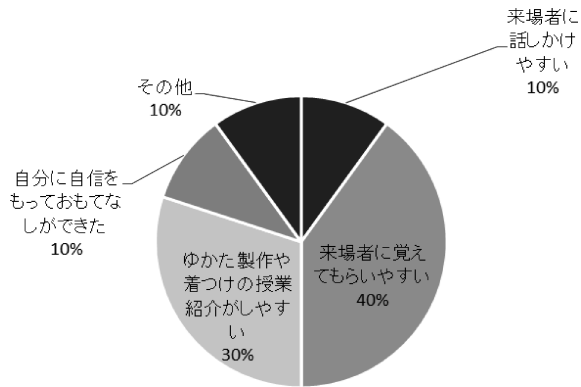


図15 浴衣着用のメリット (N=10)

思ったから。」とやや質問意図に対応していない内容であったが、浴衣が着たいという希望に対して、よい機会となったことがうかがえる。また、来場者に応対する際の自信になったり、企画の手伝いを遂行するのに便利であったりすることが着装者の全体的な意見であると言える。

それに対して、着用のデメリットを「来場者に悪目立ちする」、「着崩れや所作を洋服の時より気にしなくてはいけない」、「袖や裾に制限があるので動きづらい」、「下駄が履き慣れなくて、動きづらい」、「恥ずかしい」、「デメリットはなかった」、「その他」から1つ選んでもらったところ、「着崩れや～」が60%、「袖や裾に～」が40%であり、身のこなしが不自由であったというものに集約できた。だが、だからこそ、意識をして振る舞うことができるため、普段の自分の外見や所作を見直す機会にもなると捉えることもできる。ただし、着用者が担当する手伝い内容によっては、たもとで展示物を落とす、用具で怪我をするなどの恐れもあるため、不適切な衣服であるという認識も今回の調査で明らかになった。

今後の着用意識について、「教員主導での浴衣着用機会があればもちろん、プライベートでも積極的に着たい」、「教員主導で浴衣着用機会があるなら、積極的に着たい」、「教員主導の浴衣着用機会に都合が合えば着たいが、プライベートでは着たくない」、「プライベートだったら着たい」、「教員主導の機会があっても、プライベートでも着たいと思わない」、「その他」から1つ選んでもらったところ、以下の結果となった(図16)。

学科の代表の手伝い学生であるという立場として、高校生だけでなく、保護者も来場する公的な場所での着用体験を経験することで自信が生まれたのか、教員によるきっかけづくりや補助がなくてもプライベートで着たいと考える学生がほとんどであった。この結果から着用機会を与えることで、浴衣という衣服の対する親近感が高

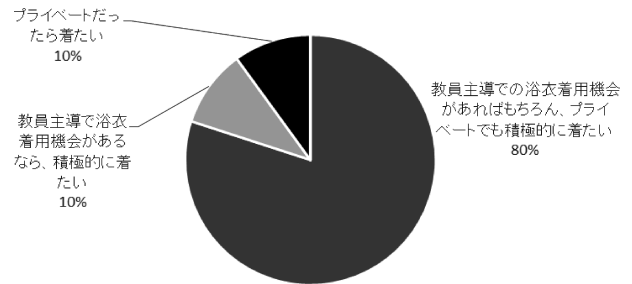


図16 今後の浴衣着用意欲 (N=10)

まり、着用したいという意識が向上したことが明らかになったと言える。

また、来年度も着用したいと答えた学生は2/3、他の手伝い学生にも浴衣着用を勧めたいと考える学生はほとんどであった。夏のオープンキャンパスにおける浴衣着用体験は、学生にとってかなり印象的で好意的で自分以外の人にも体験してもらいたいという有意義なものであったといえることができる。

なお、複数回着用者に着つけに関する習熟度を尋ねたところ、おおよそ向上したとの結果が出た(表1)。

表1 複数回答者の習熟度

複数回着用者の習熟度①帯を結ぶまで	人
ある程度は着られるようになった	3
結局一人ではできないものと思った	1
もともとできていたので、より上手になった	0
その他	0

複数回着用者の習熟度②帯結び	人
ある程度は結べるようになった	3
結局一人では結べないものと思った	1
もともとできていたので、自分なりにアレンジをしたり、回ごとに結び方を変えるようになった	0
その他	0

初回で着付けを簡単に教えたが、回数を重ねるとお互いで手順や着姿を確認し合い、自主的に着用できるようになったため、やはり場を与え、慣れさせること、しかも集団で行わせることが教育効果を得る条件だと考えられる。

以上、調査Bの結果と考察をまとめると、以下のことが言える。浴衣がそもそも夏の和服の代表であることは大前提であるが、着装機会を多数与えることで、確実に着装技術は向上し、また、オープンキャンパスの業務に

も、洋装の学生より積極的である実態が明らかになった。浴衣に対して好印象を持っているからこそ、それを活かした立ち居振る舞いを意識し、業務を自ら進んでいる様子は来場者にも好評であった。この調査については、来年度も引き続き実施し、より意識や習熟度の変化を見ていく必要があると考えられる。

5. まとめと今後の展望

今回の調査ではまだ新学習指導要領による教育を受けた学生はおらず、これまでの教育課程において和服に関するものを受けた、と言える学生はほとんどいない状態であった。よって、この調査を継続することにより、個性を表現する際、あるいは異文化と自文化の理解の手段の一つとして和装を取り入れるようになっているかどうかの比較が可能になると考えられる。

また、着装実践及び着用機会の提供により、着装に対する抵抗感は薄まり、自発的な着装のきっかけになるという効果が明らかになったため、今後はこれを教員養成課程への還元のため、着装実践経験者をアドバイザーとして参加させることで、さらなる教育実践力を養うというプログラムを構築していきたいと考えている。

なお、この内容は2015年9月20日に行なわれた「日本家政学会中国・四国支部大会」において発表したものに、加筆修正を行なったものである。

注

- 1)『学部・付属学校共同研究紀要』(40), 広島大学学部・付属学校共同研究機構, pp. 147-152, 2011年
- 2)『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』(55), 日本家庭科教育学会, p. 13, 2012年
- 3) 広島市中区にある圓隆寺の総鎮守である「稻荷大明神」の祭りで、6月第1金曜日から3日間開催されている。公式ホームページによると、えびす講、住吉神社祭りと並んで広島の三大祭りに数えられるとされている。
- 4) 2015年6月21日, 7月12日, 7月25日, 8月9日, 9月6日の計5回である。注3の通り、広島では「とうかさ」に向け、アパレル量販店や大型スーパー、百貨店などで浴衣の取り扱いが5月初め頃から始まり、広島市内に在住・通学する学生にとって6月に浴衣を着用することに対して違和感がないことから第1回オープンキャンパスから着用実践を行なった。
- 5) 著者が準備した浴衣は既製品とゼミ生などから借りた、授業で制作した手縫いの浴衣である。手縫いの浴衣は制作した本人のサイズで作ってあるため、本人以外の人物が着用する際、やや不具合があったが、複数回着用者は自分では作るときに選ばないであろう柄を楽しむためにあえて選んで着るという行動も見られた。なお、帯は全て既製品である。

図・表出典一覧

図1, 3~11, 13, 15~16及び表1 調査票を用いて著者作成

図2 文中に明記

図12及び14 2015年7月25日に広島女学院大学において山井美早紀実験実習助手が撮影